

キウス周堤墓群 (千歳市)

しゅうていぼぐん

縄文時代後期後半（約3200年前）に造られた大規模な集団墓地です。地面を円形に掘り、その土を周囲に盛り、ドーナツ状の土壘で囲った共同墓地であり、周堤の外径は最大で75m、高さは底面から盛土の頂部まで5mに達する巨大なものもあります。

周堤墓は石狩低地帯の南部に集中しており、単独で存在するのではなく、複数で対を成して造られていることが多く、このような大規模な共同墓地の出現は、これまで縄文社会の中では見られなかった集落の階層化など、社会構造の変化を示す極めて重要なものです。

◀ 周堤墓群の実測図。8基の周堤墓が確認されている



▶ 第1号周堤墓に沿って、人が並んだ写真。周堤墓の大きさがよくわかる

大船遺跡 (函館市)

おおふねいせき

縄文時代中期後半（約4500年前）の大規模な集落遺跡であり、深さ2mを超える大型の竪穴住居跡などが百棟以上確認されています。

この遺跡からは、クジラやオットセイなどの海洋資源の骨やクリなどの植物資源のほか、東北地方や北海道中部で作られたと思われる土器や石器などの遺物も見付かっており、活発な交易が行われ、地域の拠点集落として栄えたことがうかがえます。

また、竪穴住居群に沿って、膨大な量の土器や石器等の道具類が出土しており、鹿角で作った縫い針が折って並べられているほか、火を焚いた儀式の痕跡も確認できることから、役割を終

▶ 密集して重なり合う竪穴住居跡



◀ 復元された集落跡

えたモノに感謝するために祭祀が行われていたと考えられています。

かきのしまいせき 垣ノ島遺跡 (函館市)

(函館市)

縄文時代早期から後期（約9千年前〜約3千年前）の集落遺跡であり、約6千年間もの長期にわたり定住していた拠点集落と考えられています。

当時の生活は、豊かな海の恵みに支えられていたと思われる、網漁に使われたと思われる石の重りが出土しているほか、子供の足形を粘土板に押し付けた「足形付土板」も見付かっています。これは、早くに子供を亡くした親が形見として大切に保管し、親が亡くなったときに一緒に埋葬されたと考えられています。

また、4千年前には土器・石器等の道具類が積み重なってできた国内最大級の盛土遺構（高さ2m、長さ190m）が造られたと考えられており、祭祀・儀礼の空間として当時の精神性を示す遺構として重要なものです。

◀ 子供の足跡が付いた足形付土版



▶ 国内最大級の盛土遺構（白破線部分）



札幌

室蘭

函館

入江貝塚・高砂貝塚
いりえかいづか たかさかいづか
(洞爺湖町)

入江貝塚は縄文時代後期前半(約4千年前)、高砂貝塚は縄文時代晩期(約3千年前)に形成された貝塚を伴う集落遺跡です。

入江貝塚からは15基の墓が発見されていますが、その中で四肢骨が極端に細い大人の骨が見付かっています。これは、幼少期にポリオ(急性灰白髄炎・小児麻痺)に感染し、歩けなくなつた後も、集落の中で介護されながら十数年間生活していたと推察されます。当時は乳幼児の死亡率が極めて高かつたと考えられています。そうした厳しい環境の中でも、介護が必要な子供を集落全体でケアしていたと考えられており、世界の先史文化の中でも極めて珍しい事例と思われれます。

高砂貝塚は、冷涼な気候の中で形成されたと考えられており、縄文後期以降の墓が29基発見されています。



北海道に生息していないイノシシの牙製品が出土。本州と交易していたと推測されている(入江貝塚)



墓から出土したポリオに感染したと思われる人骨(入江貝塚)

北黄金貝塚
きたがねかいづか
(伊達市)

縄文時代前期(約6千年前)〜約5千年前)の集落遺跡であり、有数の貝塚分布地帯として知られています。

当時の気候は今よりも暖かく、海岸線は内陸にある北黄金貝塚の近くまで及んでいたと考えられています。その後、少しずつ気候が寒くなるにつれて、海岸線は内陸から離れていきましたが、この遺跡にある5箇所貝塚は海岸線の移動に伴い造られたと推測されており、自然環境の変化に応じて生活の場が変わっていったことが分かります。

また、貝塚にはハマグリやヒラメなどの水産資源やシカなどほ乳動物の骨などとともに、丁寧に葬られた人の墓も一緒に発見されているほか、湧水地周辺には調理などに使った石皿や擦石(すりいし)が大量に集積された場所

も見付かっています。

当時の人々は、人間はもちろんのこと、動物や植物、さらには道具にも魂が宿っており、役割を終えたときには「その魂を送る」という祭祀が行われていたと推測され、アイヌ文化の「送り」との関係を考える上でも重要な遺跡と考えられています。



水場から発見された大量の擦石など

復元された竪穴住居



鷺ノ木遺跡
わしのき いせき
※関連遺産
(森町)

縄文時代後期前半(約4千年前)に造られた環状列石と集団墓地を有する遺跡であり、道内最大規模である環状列石は直径約37mのほぼ円形で、中心に楕円形の石があり、外側を二重に巡る環状の石が配置されています。

この遺跡は道央自動車道建設に伴う発掘調査中に発見され、住民と行政が一体となって保存運動に取り組み、高速道路の建設をトンネル工法とするなど、遺跡の保存が決定されました。工事関係者は遺跡を壊さないよう手作業で掘り進めながらトンネルを完成させ、現在この遺跡は道央自動車道の森インターチェンジから札幌方面に向かうトンネルの上に保存されています。

現在、鷺ノ木遺跡は関連遺産として位置づけられており、今後は史跡整備を進めながら、構成資産として追加登録を目指し、他の遺跡とともに活用を図っていく予定です。



土器に描かれた文様は、北東北で出土したものと類似性が指摘されている

道内最大の環状列石



活動している道内団体!!



重要文化財「土面(千歳市ママチ遺跡)」
(提供: 国 ※文化庁保管)

民間主体で気運醸成を

「北の縄文道民会議(正式名称: 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議)」は、より多くの人たちに北海道の縄文文化の素晴らしさや魅力を知ってもらい、縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた気運を盛り上げていくため、経済界や学識経験者など幅広い民間人を中心として、平成24年4月に設立しました。

現在、個人と法人を合わせて会員数



国宝「中空土偶」(提供: 函館市教育委員会)

北海道 縄文のまち連絡会

縄文の知恵をまちづくりに生かす

北海道内には、約1万2千箇所(平成29年4月現在)の遺跡があり、その94%が縄文時代の遺跡です。つまり、道内ほとんどの自治体で縄文遺跡が見付かっています。

こうした背景から、縄文人の高い精神性(世界観)や知恵を生かし、これからのまちづくりの方策を探ることを目的に、道内27市町村による「北海道縄文のまち連絡会」を平成22年10月に設立しました。

大人気! 「考古学カフェ」

連絡会では、縄文時代の遺跡の魅力を直接伝えるため、札幌駅前地下歩行空間で「考古学カフェ」を開催しており、それぞれのまちで発見された土器などを持ち寄り、加盟自治体の学芸員が出土品を直接解説しています。また、このイベントでは、石器づくりのデモンストラーションや勾玉づくりの体験

学習を行っており、大人から子供まで楽しめる内容となっています。

先史時代の人々の生活の一場面を札幌の中心部で体感でき、遺跡や文化財に興味を持たない人にも楽しんでもらえる内容であることから、平成30年6月に開催した「考古学カフェ2018」には1万人近い来場者が訪れました。

世界遺産登録からが勝負

これまでも連絡会では、世界文化遺産の推薦候補の資産にも勝るとも劣らない素晴らしい遺跡が道内にたくさんあることをPRしてきており、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されることになれば、より一層道内の縄文遺跡に関心が向けられるものと思われれます。この機会に、道内の遺跡などをアピールし、道民全体が誇りを持てるような取組をこれからも進めていきます。

国内外から訪れる観光客の方々に、北海道の縄文文化の価値や魅力を伝え、縄文ファンの拡大に向けた取組を行っています。

また、道民会議では道内の旅行業者と連携し、「聞いて・見て・触れて・学んで体験する」をテーマに、道内外の縄文遺跡を巡るツアーを企画しています。各自自治体の学芸員の協力をいただきながら、現地で実際の発掘当時の状況などを詳しく解説することで、



▲ HPでは個性豊かな土偶がデザインされたポストカードも販売している



▲ 縄文カフェで学芸員が遺跡や出土品の魅力を解説



▲ 石器づくりの実演

世界遺産登録に向けて



縄文の魅力札幌で伝える

研究室では、学内展示室とホール内で、道内各地の遺跡にスポットを当て、遺跡や出土遺物などを紹介しており、これまでに、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産となっている遺跡のほか、礼文島、札幌市、十勝地方、石狩川流域などの遺跡を取り上げています。展示場は一般公開しており、地域の方ももちろん、国内外からの観光客も見学できます。

考古学の視点で縄文を考える

平成28年4月に開室した「札幌国際大学縄文世界遺産研究室」では、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録に向け、地域の方々と一緒になって世界遺産推進運動や世界遺産を活用した地域おこしなどの取組を行うとともに、学内外での講演会や展示会などの開催により、縄文の魅力を発信しています。

国内外に縄文文化のファンを！

道民会議では、道内各地で活動している縄文関係団体と連携し、「さつぼろ雪まつり」の開催時期に合わせて「縄文雪まつり」を開催し、国宝の中空土偶の複製などを展示することで、

世界遺産を守り伝える人材を

縄文遺跡群の世界遺産登録が実現するためには、広く北海道・北東北の方々の応援が必要です。

研究室では、将来にわたって世界遺産を保存し、北海道の貴重な遺産を守り、活用していく人材を育成するため、これからも取組を続けていきます。

また、「縄文太鼓と舞踊の夕べ」などのイベントを開催し、縄文文化に親しむ取組も行っているほか、伊達市の「だて噴火湾縄文まつり」などに学生等が参加し、体験学習のサポートや展示品の解説を行うなど、学生たちの学びの場を広げるとともに、地域の活動の支援に結び付く取組も行っています。

これらの活動は、札幌国際大学のホームページやTwitter（ツイッター）等を通して、全世界にその内容を発信しています。

世界文化遺産の登録に向けて

道民会議では、これからも北海道の縄文文化が長く親しまれ、次の世代にも受け継がれる財産となるよう、その素晴らしさや魅力をより多くの方々知っていただくための情報発信を行っていきます。



札幌国際大学 縄文世界遺産研究室

▲ Twitterを活用した情報発信



▲ イベントでの出土品の解説



▲ 縄文遺跡を巡るツアーの状況



漁師が恋した小さな牡蠣 ～COYSTER (コイスター) の誕生～

北海道の北東部、オホーツク海に面した湧別町は、道内最大の湖「サロマ湖」を擁する雄大な景色を楽しませてくれる町です。その湧別町で地元の漁業協同組合が中心となって、特産品の一つである生食用の1年牡蠣(カキ)のブランド化に取り組んでいる「漁師が恋した小さな牡蠣 COYSTER」についてお話を伺いました。

(取材者 中山 貝澤 橋場)

地元の漁師は恋しています

一般的に牡蠣といえば、身が大きくて、ブリッとしたものをイメージすると思います。しかし、サロマ湖で獲れる牡蠣は一般的な牡蠣よりも小粒なのが特徴です。通常の牡蠣は2〜3年物が水揚げされますが、サロマ湖の漁場環境と漁業資源を包括的に管理するサロマ湖養殖漁業協同組合が設定したルールにより、サロマ湖の牡蠣は最長でも2年物までしか水揚げできないことによるものです。

サロマ湖はオホーツク海と佐呂間別川や芭露川(ぼうろがわ)など海水と淡水が混ざり合う汽水湖であるため、牡蠣の餌となるプランクトンが豊富で、サロマ湖で育った小さな身の中には、旨みがギュッと凝縮され、牡蠣特有の磯臭さもなく、クセのない牡蠣が育ちます。

また、平成28年に東京で開催された「日本全国牡蠣祭り〜オイスターグランプリ2016」※では、サロマ湖で育った2年牡蠣がグランプリ優勝に輝き、サロマ湖産の牡蠣は、地元漁師の自信作となっています。

北限の1年牡蠣を 地域のブランドに

サロマ湖産の牡蠣のブランド化に取り組んでいる湧別漁業協同組合では、従前1年物の牡蠣をむき身で出荷し、2年物は殻付きとむき身で出荷するのが主流でした。

しかし、1年物の牡蠣のむき身は、水揚げがピークとなる12月頃に出荷数量が過剰になると、通常1kg当たり2千円前後で推移しているものが、千円を割ることがたびたびありました。価格の下落を防ぐために漁業協同組合として何かできないものかと考えていたところ、地元の(株)YBTより「湧別サロマ湖産の牡蠣を北限牡蠣としてブランド化してはどうか」との話がありました。そこで、全国的にまだ知られていない食材をブランド化していくことに特化した東京にある専門会社を紹介され、共同企画として1年物の牡蠣を全国にPRするブランド化の取組が平成29年にスタートしました。